

シスパーレ行動記録

7月17日 日本ーイスラマバード
7月25日 パスーよりトレッキング
7月26日 BC (4000m) 入り
7月28・29日 初登ルート 5600m まで偵察・順応 (宿泊 5160m)
8月1〜4日 パスーピーク方面へ 6750m まで順応 (宿泊 6400m)
8月7〜9日 好天待ちのため、フンザで休養
8月13・14日 アタックを試みるも大雪の為 5000m で一泊して BC に引き返す
8月18日 BCーC1 (5450m)
8月19日 C1ーC2 (6500m)
8月20日 C2ーC3 (6850m)
8月21日 C3 停滞
8月22日 C3ー山頂 (7611m)ーC4 (7200m)
8月23日 初登ルート下降ーC5 (5750m)
8月24日 C5ーBC
8月25日 BC 撤収ーフンザ
8月28日 イスラマバード着
9月1日 日本着

7月21日、イスラマバードより陸路でフンザへ向け出発。夏季のみ通行可能なバブサル峠経由でチラスに入り、そこからは KKH (カラコラムハイウェイ) をフンザへと北上していく。近年、フンザは外国人よりもパキスタン人観光客で賑やかでびっくりする。

・トレッキング

7月25日、KKH 沿いのパスー村からジープに乗り換え、Borith Lake を越えて終点の ZeroPoint よりトレッキングが開始する。初日の歩きは Luzhdur (ラズダール) まで3時間半ほどだが、白く綺麗なパスー氷河を横断する。ポーターたちの巧みなルートがファインディングで、迷路を抜けた左岸のモレーンに広がる草原でキャンプをする。

翌26日は、尾根上の Patundas (パトゥンダス) までを急登を登る。視界が一気に広がり目の前には目指すシスパーレが見え、足元には花の絨毯が広がっていた。パスー氷河左岸にある4000m の BC まで緩い下り道をたどる。この日も約3時間半ほどの歩きで昼には BC 到着。パスーピークを目指すパキスタンの登山隊が既に入山していた。

・高度順化・下降路の偵察

7月28日、高度順化と下降路・北東壁の偵察を兼ねて、初登ルートへ向かう。BC からパスー氷河を横断して右岸に渡り、東支稜に取り付く。氷河はまさに迷路のようで、右往左往しながら安全なルートを探すも、クレバスをジャンプでやり過ごす場所も多かった。東支稜に取り付くタ

イミングも難しく、氷河と東支稜側壁のコンタクトラインを行ったり来たりしながら進み、西面の雪壁から稜線に上がる。翌日はさらに上部 5600m まで稜線をたどり、下降路の状況を把握し一気に BC へ戻った。稜線の岩稜には過去の登山隊が設置した FIX ロープが多少残っていた。

・パスピーク

BC で 2 日間休養した後、パスピークへ向けて出発。パスピーク (7478m) はシスパーレの北西 8 km 程に位置し、下部アイスフォールさえ越えてしまえば技術的困難は少なく登れる。今回は高度順応とシスパーレ北西稜の偵察のために登山許可を取っていた。パキスタンのパス一隊は下部アシスフォールの状態が悪く、ルートワークも進まず早々に BC を撤収し下山していった。我々は遠回りではあるが、パス氷河の右岸からシスパーレ北面のプラトーに登り、大横断してパスピークへ向かう安全なルートから進んだ。残念ながら悪天候に阻まれ、登頂することはできなかったが、6750m (6400m で 2 泊) まで高度順化を行い BC へと下山した。次の好天期でシスパーレに挑戦かと思われたが、数日間の悪天予報が続いた為フンザに下山し 3 日間の休養をとる。

・シスパーレ 1 回目の挑戦

BC に戻っても、相変わらず曇りや雪の天気が続き、天気予報とのにらみ合いが続く。今年の夏はパキスタン全土で雨が多く、山岳地域は土砂崩れも頻発していたらしい。パス一での高度順応から 9 日後、しびれを切らして、多少の悪天なら下部では影響少ないと判断し、曇り空のなか BC を出発が、午後から降雪でホアイトアウトにり進むべき方向もよく分からなくなってしまった。結局、5000m で一晩待機したが、積雪も 40~50cm 程あり、到底壁に取り付ける状態ではなくなってしまう、渋々と BC へ引き返す。

・シスパーレ 2 回目の挑戦

ここまできたら、我慢比べ。壁の雪が安定して、安全に取り付けるまで、最後のチャンスにかける。予報では晴れになっていても、シスパーレの山頂だけは常に曇っていてなかなか姿を見せることはない。明らかに登山前半の天気とは変わってしまった。

8 月 17 日、午前中の数時間だが、天気が回復し、シスパーレの壁に陽が当たった。翌 18 日も相変わらずスッキリしない天気だが、意を決して BC を立つ。歩き慣れた迷路氷河を横断し、いよいよ北東壁に取り付く。初日はセラック崩壊の危険性が高いルンゼから始まるが、案の定大きな崩壊に捕まる。最初は小さな崩壊で少し雪を被ったぐらいで済んだものの、2 回目は大きな音と雪煙で、見るからにこれはヤバいという規模。急いで逃げるも、途中でクレバスに片足がハマり、繋いでいるロープもピンと張られ、お互いが中途半端にしか隠れられず、1 分ほど爆風雪にさらされる。しばらく息ができないほど強烈な風であったが、お互い埋まることはなく、事なきを得た。逆にこんな大きな崩壊にあっても、なんとかなるという吹っ切れがついたのと、さすがにしばらく大きな崩壊はないだろうという勝手な安心感で、その後はスムーズに通過できた。天気の影響で出発が遅れたこともあり、初日は予定より少し手前の雪稜上で整地して幕営。

8 月 19 日、テントサイトより尾根を乗っ越して 60~70°の冰雪壁に取り付く。少し雪が被っているものの、ほぼアイススクリーでランナーが取れた。スピードをあげる為、中間支点は 1 本

でひたすら同時登攀を続ける。スピードは早いものの、ふくらはぎは徐々に悲鳴をあげている。S字状の冰雪壁を越え岩壁にぶつかったら、基部を左へ4Pトラバースしてルンゼ状岩壁に取り付く。この頃から天候は崩れだし、頭上からひっきりなしにスノーシャワーが降りかかってくる。当初の予定では、岩壁基部でピバグできるかと思われたが、そんな場所は一切なく、抜けきるか今日のスタートまで戻るかの選択しかなかったため、降りしきるなかクライミング再開。薄氷ではあったが、なんとかスクリューでランナーが取れた。時折大きなスノーシャワーに身体を剥がされそうになるのを耐えながら、2Pで岩場を越える。期待していたテントサイトはすぐには見つからず、ルートとは逆側の急雪壁を3P登ると、雪崩を避けられる雪稜に出られた。細い雪稜ではあったが、なんとか2人が横になれるスペースを切り崩し幕営。

8月20日、昨日からの積雪が少しでも安定すればと、壁に陽が当たってから出発。昨日余計に登った急雪壁を2P懸垂下降してルートに戻る。さらに冰雪壁を左へ3Pトラバースすると、第2の岩壁基部に達する。傾斜は大してないものの(60°)、大きなスラブ岩に雪や氷が乗っかっているだけで見るからに悪そう。さすがにトップも空荷になってトライ。前半はスクリューが半分まで入って効いてるかどうかわからないプアプロテクションでなんとか進めるも、途中で氷も雪もないスラブ岩に支点が取れなくて時間を食う。そろそろふくらはぎも腕も限界に近づいてきてしまったので、意を決してノープロテクションで突っ込む。するとなんとか氷にアックスが刺さり、足ブラになりながらも、次の一手が出せた。こんな高所で気合いの声が出てしまったのは初めて。なんとか氷で半刺しのスクリューでプロテクションが取れて気が緩んだのか、次の一手でアックスが外れフォール。フォール中は中間ランナーが走馬灯のように思い出されたが、奇跡的にどれも抜けず、怪我なく止まった。なんとかクライミング再開し、1Pで岩場を突破することができた。終了点からは3P冰雪壁をトラバースして”く”の字冰雪壁”をひたすら登る。この頃からまた雪が降り出し、スノーシャワーが降り注いでいたので、確保しながらの登攀となった。冰雪壁を登りきったリッジを切り崩して幕営。

翌21日、昨夜から降り続いた雪は、何度もスノーシャワーとなって襲い、テントの半分以上は埋まっていた。朝から止む気配がなく、視界も悪いため1日停滞日となる。順応高度を越えてのピバグの為、中島は高山病の影響が出ていて食欲は無くなっていた。

22日、予定していた核心部(岩場)も抜け、標高差的には山頂に届く高度であったので、気張って早起きするも、まだ雪は止んでない。視界が開けた6時ようやくテントを出発する。昨日までの降雪でスタートから深いラッセル。急斜面をバンザイしてラッセルしたり、空荷でラッセルする様は、まさに日本の冬山を登っているようだった。しかし、日本のそれとは大きく違う標高の影響で、身体が思うように動かず時間だけが過ぎてゆく。テントサイトから1P急雪壁、3P右の雪稜へトラバース、4P雪稜を登ると、ようやく頂上稜線へと出た。深い雪に苦戦し、時間は既に11時を回っていた。ここにきてようやく衛星電話が繋がったため、翌日の天気予報を日本から入手する。翌日の予報は悪くないものの、本日の予報もクリアとなっている。風雪にさらされ、どこがクリアなんだ! ?と言いたくなるような天気ではあるが、視界はそれほど悪くない。頂上まで400m近く残っているが、置いていけるもの全てその場にデポして、少しの行動食と飲料、ロープ1本と最低限の登攀具を身につけて急いで頂上へ目指す。風は強いものの、雲の隙間からラカポシが見えることがあった。途中からは完全に雲の中で、帰路の方角を確かめながら進

む。視界が悪いため、幾度となく偽ピークに一喜一憂しながら冰雪壁を進んでいくと、ついに登るべくピークが無くなった。山頂からの景色はなく、感動に浸る余裕も一切ない。時間は14時半を回っており、ホワイトアウトした帰路のことが気がかりだ。風雪にさらされた平出のヒゲは、サンタのように氷が張り付いた。山頂から留守本部に電話を入れ、早々に下山にかかる。既にトレースはほとんど消えていたが、コンパスを使用しながらなんとか暗くなる前の夕方にデポ地に戻る。視界があればさらに高度を下げたかったが、風雪の視界不良のため、本日はこの斜面を削ってビバークとなる。相変わらず夜中はスノーシャワーにテントを襲われる。

23日、相変わらずの風雪で目覚める。登頂の喜びなんかより、果たして安全にこの場を脱出できるのか。今やそんな状況と化していた。下山は雪崩やセラックの危険性が少ない初登ルートを選んだが、決して簡単なルートではない。東稜のプラトーはだだっ広く、視界がなければ下降路が見つけれない。視界が少しでも回復するよう、祈るような気持ちでテント内でスタンバイする。6:30頃、風は依然強いものの、視界が少し回復した隙を狙って出発する。雲の隙間から一瞬覗かせた下降路の東支稜へ進路をたどるも、行く手をセラックの絶壁に阻まれる。初登ルートの下部は偵察できていたものの、中間と上部は未体験。アップダウンがある雪稜を下る程度にしか考えていなかったが、そう簡単には行かない。大きなセラックを迂回したり、セラックの舌端を懸垂下降をしたりと、過去の記録通りには辿れなくなっていた。途中で3つのピークがあり、登り返しに少し苦勞はするものの、徐々に視界も良くなり、風も弱まっていったため、できるだけ標高を下げることに専念する。偵察時に到達した地点まで来て、ようやく帰路の安全が確保されて、安心して幕営する。BCを出発して6日目、ようやくスノーシャワーに悩まされることがなく、フラットで安全な場所にテントを張ることができた。

最終日、既に安全圏まで降りたように身体は錯覚したようで、足取りは重い。幾度となく横断した氷河も思い通り下れず、いつも以上に右往左往してベースキャンプに到着した。登頂時よりよっぽどベースキャンプへ戻った時の方が、込み上げてくるものが大きかった。何より無事に戻って来れたことに。

